
誰でもよかった

五十嵐貴久



幻冬舎文庫

誰でもよかった

目次

part 1	渋谷	7
part 2	SIT	42
part 3	名前	78
part 4	スレッド	116
part 5	書き込み	155
part 6	説得	194
part 7	車	232
part 8	人質	271
part 9	狙撃	310
part 10	結末	348
解説	浅野智哉	385

part1 渋谷

1

六月八日、渋谷^{しぶや}。午前十一時五十分。

男は軽トラックをスクランブル交差点の手前で停^とめた。ハザードを出す。車を停めておいても大丈夫だろうと考えた。

歩行者用の信号が青になった。目の前で何百もの人が交差点を通り過ぎていく。

(運のいい奴らだ)

男は思った。確かにその通りだった。男が今からやろうとしていることを考えれば、通り過ぎていく歩行者は運がよかった。

あと十分、スクランブル交差点を通過するのが遅かったら、彼らも無事では済まなかった

だろう。運のいい奴らだ、と今度は声に出して言ってみた。車内に虚ろな声が響いた。

ワイシャツの胸ポケットに触れた。無機質な感触。携帯電話がそこにあった。男は携帯を取り出した。携帯の液晶画面は大型掲示板「ちゃんねるQ」につながったままだ。

自分の書き込みを確認した。十分前、男が書き込んだままの掲示板がそこにあった。

いつものことだが、誰からも新しい書き込みはなかった。無視かよ、とつぶやいて、画面をスクロールしていく。昨日残した書き込みがそこにあった。

「明日。昼。渋谷で人を殺します」

文章は短いものだった。十四文字のメッセージ。誰も気づいていないのだろうか、と男は思った。そうなのだろう。誰もこの書き込みを読んでもいないのだ。

無視されている。いや、誰も男の存在に気づいてさえない。

ここはこんなにも平和だ。男はフロントガラス越しに前を見た。青信号が点滅を始めた。人々がせわしなく歩いている。

老人が一人、足をひきずるようにしながら横断歩道を進んでいるのが見えた。頑張れ、ジジイ、と男はつぶやいた。

さっさと交差点を渡れ。そしてできる限り遠くへ行け。ここには戻ってくるな。

もうあと数分でスクランブル交差点は地獄へと変わる。巻き込まれたくなかったらさっさ

と行け。

老人が横断歩道を渡り終えた。スクランブル交差点の歩行者用信号が赤に変わる。目の前で車が走り出した。

男は慣れた手つきで携帯のボタンに触れた。画面が切り替わり、文字を打ち込めるようになった。男はひとつひとつ丁寧ボタンを押す。

へ今、渋谷。これから人を殺します

送信した。確認をする。掲示板に書き込みがなされていた。

いいだろう。ここまでは順調だ。誰にも邪魔されることはなかった。男を止める者は一人もいなかった。

当然だ。誰にもどうしようもない出来事なのだ。これから人々を襲う災いは、誰にも止めることのできない、一種の天災のようなものだからだ。

そういうことだ、と男が軽くうなずいた。これは天災と同じだ。地震や台風を誰にも止めることができないのと一緒で、誰にも自分の行動を止めることはできない。そして災いが訪れた後、何があったかを知ることになるのだ。

男は腕の時計を確認した。十一時五十八分。あと二分だ。予定していた時間まであと二分。アクセルを軽く踏んだ。エンジンはかけられたままだ。ギアをニュートラルに入れている

ため、車が動くことはなかったが、足元を通じて排気音の振動を感じた。

問題はない。何も問題はなかった。男は携帯に手をやった。今度は速いスピードでボタンを押していく。すぐに文章ができた。

へいよいよ時間です

ただそれだけだった。送信する。今度は確認をしなかった。できなかったという方が正しいだろう。その時、男の目の前で信号が赤になり、歩行者用の信号が青に変わった。スクランブル交差点に人があふれだした。

(時間だ)

ハザードをつけたまま、ギアをドライブに入れた。軽トラックがゆっくりと動き始める。大丈夫だ。誰も邪魔する者はいない。

信号の手前で停まっていたタクシーを避けながら、右車線に出た。そこに他の車はいなかった。すぐ目の前を人々が歩いている。

いよいよだ。サイドブレーキを入れたまま、エンジンをふかす。凄まじい排気音が出た。

(行け)

つぶやきながらサイドブレーキを解除した。軽トラックが交差点を渡っている人々の群れに突っ込んだ。

柿沼英次かきぬまひじが渋谷駅に着いたのは十一時五十五分のことだった。時間通りだ、と携帯の画面で時間を確かめてからうなずいた。

今日は柿沼にとって記念すべき日だった。大学の同じ学部にいる新藤美香子しんどうみかこという女の子を口説き落として、初めてのデートだったのだ。

十二時、渋谷Q.F.R.O.N.Tキューブフロント前で待ち合わせ。美香子がそう言った。ちょうどいい時間だ、と柿沼は思った。

渋谷駅ハチ公口の改札を抜け、スクランブル交差点前に立った。平日の昼間だというのに、交差点の周りには人があふれていた。彼らは何をしているのだろう、と柿沼は考えた。

(ガキが多いな)

胸の内ですぶやいた。渋谷といえば若者の街だ。若者が大勢いるのは当然のことだろう。信号が変わるのを待ちながら、柿沼は長く伸ばしている髪の毛に手をやった。大丈夫だ。ヘアスタイルは決まっている。

(今日はいい日になる)

それは確信だった。今朝、起きた時から思っていたことだ。

寝覚めもよかった。ベッドからシャワーに直行したが、その時から目は冴えていた。

昨夜は初デートを控えて少し興奮気味だったが、それでも午前一時頃には眠りに入っていた。今朝、起きたのは八時だ。睡眠時間は十分だった。

シャワーを浴び、新しいシャツとパンツに着替えた。準備していた通りだったが、今朝は何もかもがうまくいっていた。今着ている服も一発で決まった。すべてが思い通りだった。

信号が青になった。柿沼は携帯の時刻表示に目をやった。十二時ちようどだった。

美香子はもう来ているだろうかと思った。来ているかもしれないし、来ていないかもしれない。

どちらにしても、それほど待つことはないだろう。美香子が時間にきちようめん几帳面な性格であることは柿沼にもわかっていた。

一步を踏み出す。一瞬、何が起きているのか自分の目を疑った。凄まじい排気音が出て、右方向から、軽トラックが突っ込んできたのだ。

はね飛ばされた人たちが人形のように倒れていく。何が起きているのか。考えている時間はなかった。軽トラックが自分の方に向かってきているのがわかった。逃げよう。逃げなければ。

だが、すべてが遅かった。走り出そうとしたその瞬間、突っ込んできた軽トラックのボディが自分の腰辺りにぶつかった。強い衝撃。柿沼は二メートルほど吹っ飛ばされ、アスファルトの上に倒れた。痛みは感じなかった。

無我夢中で起き上がった。左腕にべつとりと血がついている。アスファルトでこすれて傷がついたのだ。

(助けてくれ)

必死で立ち上がった。すぐに左足から崩れた。足。柿沼は自分の足を見た。左の足が思いもよらない方向にねじ曲がっていた。強烈な痛みが柿沼を襲った。激痛。

「助けてくれ」

口が勝手に動いた。動けない。逃げようがなかった。足に力が入らないのだ。

周囲から悲鳴が聞こえた。トラック。

柿沼は目を上げた。軽トラックが勢いよく走り出しているのが見えた。危険だ。ここにいては危ない。逃げなければ。

だが、足は動かなかった。トラックが猛スピードで近づいてくる。とつさに右足だけで跳んだ。思うように体が動かない。またアスファルトの上に倒れた。頭を抱えた。

トラックが来る。助けてくれ、と叫んだが、誰も来てはくれなかった。トラックの右前輪

14
が自分の腰の辺りに乗り上げるのが見えた。そのまま柿沼は意識を失った。

3

人が飛んでいる。三枝満明さんげきみつあきは信じられない思いで周囲を見た。渋谷スクランブル交差点の辺りで人が飛んでいた。いったい何が起きているのか。

すぐにわかった。軽トラックが信号を無視して、交差点に突っ込んで来たのだ。

悲鳴が長く伸びた。人々が三枝のいる方向へと逃げてきている。慌てて三枝も走り出した。本能的な恐怖から、足が勝手に動き出していた。

センター街へ逃げよう。頭がフル回転して、最も危険の少ないルートを導き出していた。自分の喉が叫び声を出しているのを三枝は感じていた。

鈍い音が聞こえた。振り返ると、初老の男がトラックと衝突して、数メートルも飛ばされている光景が目映った。トラックはどっちに向かっているのか。

次の瞬間、トラックの鼻先が自分の方向に向かっているのを感じた。こっちだったのか。センター街へ逃げようとした自分の勘は外れていたのか。

トラックが勢いよく走り出した。三枝の選んだルートを知っているかのようだった。車体

が近づいてくる。逃げ切れない。

(どうする)

どうしようもない。センター街に逃げ込むしかなかった。必死で走った。足が思うように動かない。それでも三枝は走った。殺される、という恐怖感があった。なぜだ。なぜこんなことに。

三枝は三十五歳のサラリーマンだった。銀行に勤めている。今日は顧客と渋谷で待ち合わせていた。預金の運用プランを話すためだ。

約束は十二時半だったが、早く着いたのは三枝のいつもの習慣だった。客の時間を無駄にしないというのは、先輩の銀行マンから教わったことだ。だから早めに渋谷まで来た。

なぜだ、と走りながら思った。何も悪いことはしていない。それなのになぜこんなことに。背中のすぐ後ろでクラクションが鳴っていた。軽トラックだ。そう思ったが、振り返って確認することはできなかった。早く。一秒でも早く、センター街に逃げ込まなければ。

その時、衝撃が襲った。転倒していた。軽トラックのノーズ部分が激しくぶつかっていたのだ。体が痛い。転んだ際、全身を強く地面に打ちつけたためだ。

(まだ大丈夫だ)

手について立ち上がった。軽トラックはどこにいる。辺りを見回した。トラック。いるの

か。顔を上げた。目の前で軽トラックが動いていた。スピードが落ちている。なぜだ。

三枝は運転席を見た。白い布状のものが見えた。

(エアバッグだ)

人を轢いていた軽トラックが、衝撃を受けたため、エアバッグが作動したのだということがわかった。スピードが遅くなっているのはそのためだ。

運転者も予期していなかったのではないか。軽トラックのスピードが落ちていき、最後には三枝のいる場所から二メートルほどの距離で停まった。

(助かった)

三枝が口の中でつぶやいた。だが、そうではなかった。停まった軽トラックの運転席から、男が降りてくるのが見えた。

普通の男だった。白いワイシャツとグレーのスラックスを身につけている。ジャケットは着ていなかった。身長は低い。小柄といってもいいだろう。百六十センチあるかないかというところだ。

年齢はどうなのか。三十歳前後と思われた。三枝は男の右手を見た。右の手のひらに握られているのはナイフだった。ナイフの刃が陽光を浴びて輝くのが見えた。

(ナイフ)

何のためにナイフを持っているのか。考えるまでもなかった。男との距離は二メートルほどだ。逃げなければ。軽トラックを運転していた男から離れなければならない。それは直感だった。

その直感が指示する形で、足を動かした。歩けない。なぜだ。歩けない。三枝は足元を見た。靴は裂け、右足の爪先部分が損傷し、中から足の骨が見えた。爪先は血だらけで、傷は深かった。痛みが全身を襲った。

(逃げよう)

三枝は一歩足を踏み出した。痛みは激しくなるばかりだった。数歩進んだところで、膝の力が抜け、その場に倒れこんだ。ナイフを持った男が近づいてくる。

「助けてくれ！」

叫んだ。どうしようもなかった。だが、助けてくれる者は誰もいなかった。

三枝は這うような形でナイフの男から離れようとした。辺りを見回していた男が三枝の方に目をやり、確認するようにうなずいた。そのまま近づいてきた。三枝の喉から絶叫がほとばしる。

「誰か、助けてくれ！」

だが、無駄だった。男がナイフを構えながら自分の方に歩いてくるのを三枝は見た。そし

18
て、それが最後だった。男がナイフを三枝の喉に当てた。

4

何人の人を轢いただろう。男にはわからなかった。何百人もの人々が往来するスクランブル交差点に突っ込んだ。そこまでは覚えていてる。数十人を轢いたのは確実だ。

だが、そこからの記憶は曖昧あいまいだった。アクセルを踏み込み、スピードを上げた。はねたのは男も女もいた。運の悪い奴らだ。

男にとって、殺す相手は誰でもよかった。スクランブル交差点を歩いているすべての人間がターゲットだった。

軽トラックがスクランブル交差点の中へ突っ込んだ時、悲鳴があがった。男性もいたはずだが、すべての声が女性のものに聞こえた。そういうものなのだ、とアクセルを踏みながら男は思った。

スクランブル交差点は酷い状況だった。そこかしこに人が倒れている。血を流している者もいた。

男は逃げまどう人々を追いかけては、はねていった。鈍い衝撃が走った。男も女も、人形

に見えた。軽トラックの威力は凄まじく、接触しただけで誰もがはね飛ばされた。凄^{すご}い、と男は思った。

(いいぞ)

アクセルを踏み込みながらつぶやいた。歩行者が逃げまどっている。それを追いかけては轢いていく。悲鳴がまるで音楽のように聞こえた。

センター街の手前で一人の男をはねた。その衝撃で、エアバッグが飛び出してきた。男の顔を白い布状の袋が覆った。

(痛い)

男の左頬に直接エアバッグがぶち当たっていた。前が見えない。これ以上車を走らせるのは難しいだろう、と男は判断した。ブレーキを踏み、減速する。車を停めた。

エアバッグの作動は男にとって想定内の出来事だった。スピードを上げて運転していれば、何かにぶつかった衝撃でエアバッグが作動することは考えるまでもない。

サイドブレーキを引いた男が、左手だけで助手席を探った。助手席に置かれていたのは一本のナイフだった。男はそれを取り上げた。ダガーナイフ。刃渡りは約十五センチ。

男はナイフを手にしたまま、運転席の扉を開けた。スクランブル交差点に立った。まだ悲鳴や助けを求める声は大きかった。

軽トラックから二メートルほどのところに、男が一人倒れていた。苦しげな声をあげている。助けを求めるように片手を振っていた。男はゆっくりとその近くに寄った。

(苦しいか)

目だけで尋ねた。倒れていた男がうなずく。そうか、と小さな声で言った。倒れていた男に馬乗りになって胸倉むなぐらを掴つかんだ。

(今、楽にしてやる)

口の中でつぶやきながら、ナイフの刃先を喉に当てた。嫌だ、と倒れていた男がナイフの刃を素手で握った。

男がナイフを引いた。購入したばかりのダガーナイフの切れ味は凄まじかった。刃先を動かしただけで、手のひらを切ったようだ。血が数滴、アスファルトの上に垂れた。

倒れていた男がしきりに首を振っている。だがそれは無意味な抵抗だった。

男がナイフを持ち替えた。喉に押し当て、思い切り強く横に引く。凄い勢いで血がほとばしった。倒れていた男が体を揺らしながら、顔を横にやった。

(死んだか)

男がつぶやきながら、ナイフの刃先を自分のワイシャツで拭いた。男の体は返り血を浴びて真っ赤だった。